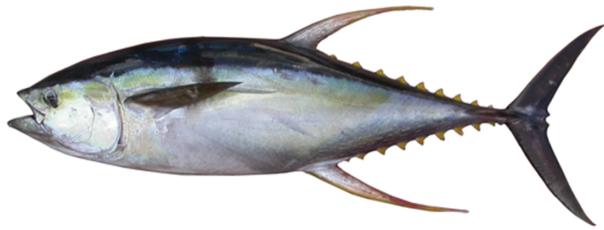


キハダ 大西洋

Yellowfin Tuna, *Thunnus albacares*



管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

生物学的特性

- 体長・体重：尾叉長2.0 m・200 kg
- 寿命：7～10歳 (18歳の可能性もある)
- 成熟開始年齢：3歳
- 産卵期・産卵場：周年・表面水温24℃以上の海域
- 索餌期・索餌場：分布域に等しい
- 食性：魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者：まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

利用・用途

刺身、すし、缶詰等

漁業の特徴

大西洋におけるキハダ漁業は1950年頃に始まり、1955年頃から竿釣り及びはえ縄漁業が開始された。当初ははえ縄の漁獲が多くを占めたが、最近年はまき網が主となっている。主漁場は熱帯域であり、特に東部大西洋からの漁獲が多い。近年はまき網のFAD操業の漁場が拡大し、南は西アフリカ沿岸の南緯15度付近、北はモーリタニア沖合の北緯15度付近まで広がっている。はえ縄は大西洋のほぼ全域で操業が行われている。竿釣り漁業は東部、西部大西洋の沿岸部で行われている。

漁獲の動向

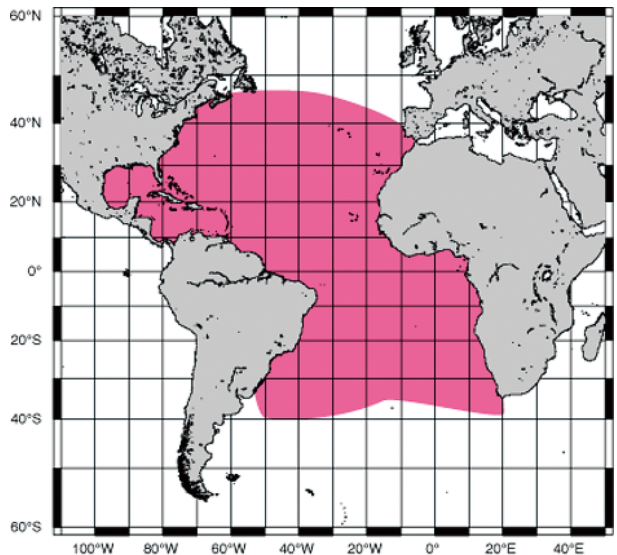
漁獲量は、当初から1970年代までは概ね増加傾向にあり、1980年以降は10万～19万トンの間で変動し、最近年は全漁獲量のうちおよそ70%がまき網、16%がはえ縄、8%が竿釣りにより漁獲されている。1990年に漁獲量のピーク(19.3万トン)が記録された後、減少傾向に転じ、2018年には13.6万トン(予備集計)となった。

資源状態

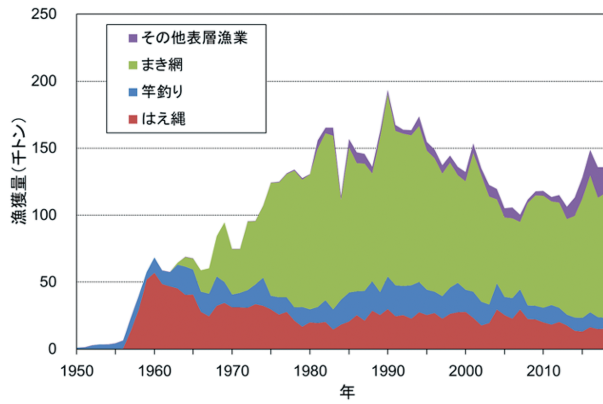
最新の資源評価はICCATにより2019年に行われた。資源評価モデルは、2種類のプロダクションモデル (MPB: Surplus production model, JABBA: Bayesian surplus production model) 及び統合モデル (SS: Stock Synthesis) が用いられた。MSYは12.1 (9.0～26.7) 万トンと推定され、2018年の漁獲量より小さい。2018年の資源量はMSYレベルより大きく ($B_{2018} / B_{MSY} = 1.17 (0.75 \sim 1.62)$)、2018年の漁獲率はほぼMSYレベルである ($F_{2018} / F_{MSY} = 0.96 (0.56 \sim 1.50)$) と推定された。したがって、2018年において、本資源は乱獲状態ではなく、本資源への漁獲率は適正なレベルであったといえる。将来予測 (3モデル統合) では、将来的な漁獲量13万トン (現状の漁獲量) で2033年 (15年後) にグリーンゾーン確率38%、11万トン (TAC) で2033年にグリーンゾーン確率86%と推定された。

管理方策

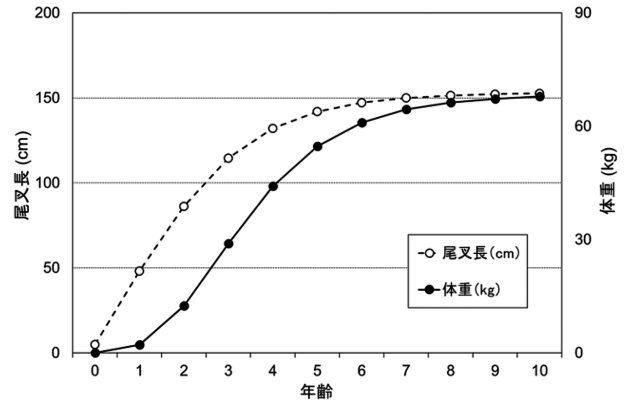
2019年11月のICCAT年次会でTACを引き続き11万トンとすることが合意された。また、従来のFAD操業の制限 (2019年1月1日～2月28日の2か月間、南緯4度、北緯5度、西経20度、アフリカ大陸で囲まれた海域で操業禁止) は強化され、2020年には1～2月の2か月間、さらに2021年には1～3月の3か月間において、大西洋全体におけるFAD操業の禁止が予定されている。



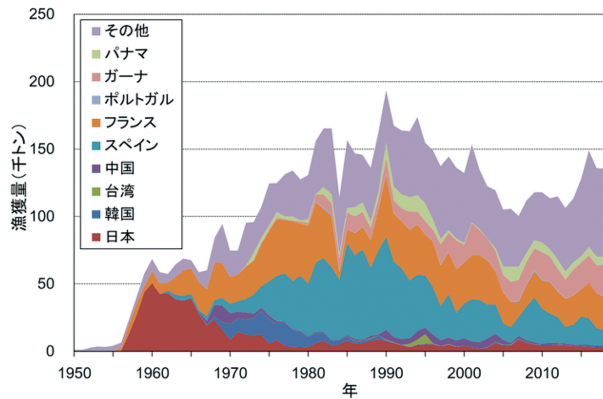
大西洋におけるキハダの分布域



大西洋におけるキハダの漁法別漁獲量

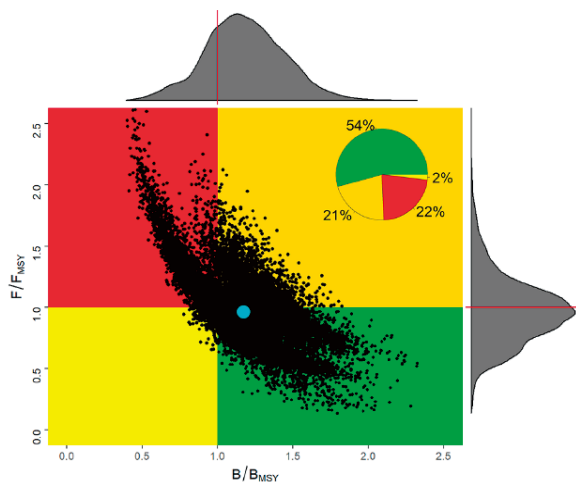


大西洋におけるキハダの成長



大西洋におけるキハダの国別漁獲量

キハダ(大西洋)の資源の現況(要約表)	
資源水準	低位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量(最近5年間)	11.3万~14.9万トン 最近(2018)年:13.6万トン 平均:13.2万トン(2014~2018年)
我が国の漁獲量(最近5年間)	0.3万~0.4万トン 最近(2018)年:0.3万トン 平均:0.3万トン(2014~2018年)
管理目標	MSY:12.1(9.0~26.7)万トン
資源評価の方法	プロダクションモデル(MPB、JABBA) 統合モデル(SS)
資源の状態	$B_{2018} / B_{MSY} : 1.17 (0.75 \sim 1.62)$ $F_{2018} / F_{MSY} : 0.96 (0.56 \sim 1.50)$
管理措置	TAC(11万トン) 大西洋全体におけるFADを利用したまき網操業の禁止(2020年は1~2月の2か月間、2021年は1~3月の3か月間を予定)
最新の資源評価年	2019年
次回の資源評価年	2024年



大西洋キハダの資源解析結果

青丸は2018年の状態を示す。黒丸は4,500回(9シナリオ×500回)のモデル設計やデータの不確実性を考慮した試行の分布を示す。縦軸は漁獲圧、横軸は資源量で現状/持続可能な値の比です。神戸プロットの上側と右側に、それぞれ横軸、縦軸についての頻度分布図を示す。